







SHARP

12:10



















Ego: Identity

For almost a dozen years, the core of my photography had been invisible to me. Immaturity prevented me from seeing what lay at the root of my photographic acts. Now I feel each passing year reveals more and more of my ego wrapped up inside the images, intertwined with experiences I would wish to forget, and feelings I would never wish to return to. Nonetheless, I am forced to face this account of myself, of my history, of what I am made of. I face distant signatures that, when placed against true meaning, are now buried in oblivion. I face places I used to belong to, but fled from. Digging deeper and deeper in my work I suddenly see shining water filling my palms. And I see reflected my exhausted face with dark-lined eyes, striking my heart and revealing my naked ego.

Hisashi Murayama

エゴ：本性

長い年月の間、自分の写真の芯が見えないまま旅をしてきました。
幼き目にはその写真の意味する根の部分が見えず、ただ旅をし模索する日々だった。
＜撮影時を振り返り想うー記憶の言葉＞

それからまた十数年の時間が過ぎ、それらに向かい合う。
時間の経過と共にそのイメージの中にあった私のエゴが剥がれていくように、一枚一枚の写真から本性が滲み出す。
＜現在も常に繰り返す問いと答え＞

忘れてしまいたい過去ー思い出したくもない過去。全て絡み合って自分へ戻ってくるように感じる。
そこには逃げられない己の性質とその確かな経験や事実が、自分を形づくり、ズシンと重い感情となって私の体を強張らせる。

写真の中には、対象とそれを凝視する自分自身の不安定な関係があると感じる、近づけば近づくほど、その距離と反して、もっと遠い場所へ放たれて行き、忘却の彼方へ埋没するように感じる。それと繋がりたいと欲しつつ、それを忘れ去りたいと欲する自分は今の私からも離れない。

深く掘り、もっと掘り、掘り続ける。写真の中の一番深い奥底には、光輝く水が流れていた。その水を手のひらに乗せると、疲れ切った自分の顔が映された。その反射にはくっきりとした目の下の隈と見覚えのない顔が見えた。

そこには私の中の裸のエゴと本性が映され、今も私の心を突き刺すようです。

村山 長